

# 看護学生の就職支援を目指した「看護実践体験課外プログラム」開発に関する研究

グレッグ美鈴 古川直美 大法啓子 藤澤まこと 平山朝子 (大学) 田辺満子 伊藤みね子  
柴倉昌美 佐藤勢津子 河合久美子 (岐阜県立下呂温泉病院・看護部) 安藤祐子 (岐阜県医療  
整備課)

## はじめに

学生は、卒業すると1名の患者を受け持つという実習とは異なる環境で働くことになる。そこから生じるリアリティショックを予防し、職場環境への円滑な移行を促すことは、大学の重要な役割である。また本学は、県立の看護大学として、開学直後より県下看護職の生涯学習ニーズに応えることを重視してきた。就職前から支援を開始し、就業している他大学卒業の看護職を含め、実態や課題を把握することから、大学としての支援方法を検討することが重要であると考え、本研究に着手した。

## I. 目的

本研究の目的は、以下の2つである。

1. 本学科の学生に対して、県内保健・医療・介護施設において、短期間の課外プログラムとして業務体験をする機会を提供し、看護職者として就職するための支援方法を開発する基礎的研究である。本年度は、1病院で試行的なプログラムを実施し、学生の反応・行動追跡調査をしつつ、本学学生に適した方式の開発を目指す。
2. 本県における大卒看護職者について、実践上の課題などを調査し、就職後の支援方法の開発に関する基礎的資料を得ることを併せて実施する。

## II. 方法

1. 既に同様のプログラムを実施している聖路加国際病院と埼玉県立大学から、情報収集を行った。それに基づいて、共同研究者間で話し合いを行い、プログラムの詳細を決定した。その後、学生の募集・参加者の決定を行い、支援体制を決めた。
2. 「岐阜県立看護大学における看護生涯教育に関する調査」(平成16年度文部科学省研究費助成:地域貢献に直結した大学の基盤及び体制づくりの方法に関する研究(研究代表者:平山学長)の一部として実施したもの)のうち、大学卒業生を対象として分析した。調査は無記名とし、調査目的を説明する文書を同封し、回答を研究承諾と見なした。

分析は、記述統計および質的分析を用いた。質的分析では、記述の意味内容を変えないように要

約し、コード化した。次にコードの類似性、相違性に従ってサブカテゴリー、カテゴリーへと抽象化した。分析結果の厳密性を確保するため、研究者間での合意が得られるまで検討を行った。

## III. 結果

### 1. 看護実践体験課外プログラムの開発

まず、文献から聖路加国際病院および埼玉県立大学で実施されているインターンシップの情報を収集し、その後、両施設を訪問して、さらに情報収集を行った。これは、就職進路対策委員会が企画している本プログラムと同様の就職体験モデル事業担当教員とともに実施した。聖路加国際病院では、就職説明会の一環としてのインターンシップサマープログラムを1クール5日間、募集人員200名で実施している。埼玉県立大学では、県内の病院にインターンシップの受け入れを依頼し、学生の希望を調整して30ヶ所余りの病院で実施している。これらのプログラムの実際や評価内容、実施上の注意事項などの情報収集結果を基に、現地側共同研究者と対象者、実施時期、期間、内容、準備すべき書類などについて話し合いを行った。

その結果、対象者は3年次生、実施時期は、2月20日(月)~24日(金)と2月27日(月)~3月3日(金)まで2グループ編成とすること、人数は最大1グループ8名とし、受け入れは1病棟2名とすること、受け入れ病棟は、学生の希望を取って決定することとした。その後、「個人情報の保護に関する誓約書」、「プログラムの参加にあたって(注意事項)」、「プログラム評価(学生・看護師)」を協議の上、作成した。

「プログラムの参加にあたって」の書類では、プログラムで体験する内容、持参物、プログラム内容(オリエンテーション、服装、プログラム期間中の遵守事項、最終日の反省会)、守秘義務、事故発生時の対処法、看護師寮の使用法、問い合わせの7項目について、内容の詳細を話し合った。

学生募集は、3年次生全員を対象として口頭で説明した上で、1月10日~1月20日の期間にe-mailで募集した(この説明と募集については、

就職進路対策委員会が企画した就職体験モデル事業とともにいった)。最終的に参加学生は8名(全員第一希望)となり、2月20日からの5日間でプログラムを実施することになった。実施病院が遠隔地であるため、プログラム実施中は、共同研究者の教員が必ず1名病院内にいて、学生の相談を受けたり、問題に対処したりする体制を整えた。また初回であるため、プログラム時間外の問題に対処する教員も決め、学生に連絡方法を伝えた。

プログラム開始10日前に、参加学生と本共同研究に関わる教員が全員集まり、学内でオリエンテーションを実施した。約1時間をかけて、プログラムの目的、実施内容、注意事項などを説明した。またこのプログラムは、受け入れ先の病院と大学の共同研究として実施しているものであり、今後プログラムをより良いものにして行くために、プログラム終了後に評価をしてもらいたいことも説明した。

## 2. 看護実践体験課外プログラムの実施

2月20日(月)～24日(金)までの5日間に8名の学生を対象としてプログラムを実施した。当初の予定では、5日間同一病棟での看護実践を体験することになっていたが、共同研究報告と討論の会でのディスカッション(後述)を基に、初日のオリエンテーション後の学生の希望で変更可となった。その結果、学生は、最少1ヶ所の病棟、最大2ヶ所の病棟と外来あるいは地域連携室で看護実践を体験した。また分娩立ち会いを希望した学生には、夜間に実施が許可された。

プログラム終了から、本原稿の締め切りまで2日しかないため、プログラムにご協力頂いた看護師の方の評価は、依頼中で回収できていない。したがって、本原稿では、プログラム最終日の反省会と学生のプログラム評価について述べる。

反省会には、共同研究者を含めて、病棟で学生を担当して下さった看護師9名の出席が得られた。学生は、病院の雰囲気の良いことや看護師間の人間関係の良さを感じたなどの感想とともに、以下のことを述べた。「患者と関わる他に、実習では体験しなかったいろいろな仕事があり、看護師がやらなければいけない業務や流れがわかり、仕事をするイメージができた。」「複数の患者を担当するので、瞬時に観察する力や看護師間のコミュニケーションの重要性、他職種との連携の実際とその重要性を学んだ。」「実習で体験しなかったことは、勉強していないということがわかり、

自分が就職するのに必要な知識がわかった。」「実習ではわからなかった看護師が看護するときの思いや根拠を聞くことができて良かった。」「自分がどんな看護をしたいかという考えをしっかりと持つことが必要である。そうでないと、たくさんある業務に流されてしまうと思う。今からしっかりと考えたい。」「救急カートの点検を一緒にやらせてもらって、知識のみではなく、それらの物品の場所を覚えておくとうすぐに対応できることを学んだ。」「何がしたいかと聞かれてもわからなかった。今日はどのようなことがあるかを先に教えてもらえれば答えられたと思う。」

プログラム終了時に実施した学生の評価結果は、以下のとおりである。

プログラムの参加動機は、8名全員が「就職の参考にするため」および「自分の学びの機会にしたかった」と答えていた。プログラムに参加したことで、「看護師がどのような仕事をしているかを知ることができたか」「看護師の仕事に興味を持てたか」「就職を考える際の参考になったか」の3つの質問に、8名全員が「はい」と答えていた。

プログラムへの意見、感想、改善案では、「1病棟を5日間体験する当初の予定より、希望により複数の病棟を体験した今回のやり方が良かった」「担当の看護師さんがいなかったとき、どうすれば良いかわからなかったので、しっかり担当の看護師さんがいると良い」「担当看護師がカルテの記入をしているとき、ステーションですることがなくて困ることもあった」「5日間というプログラムの長さはちょうど良かった」「3日間のコースもあると申し込みがもっと増えるのではないかと思った」「師長さんはプログラムについて良く理解して下さっていたが、スタッフの方に十分伝わっていないようだった。スタッフの方全員に目的などが伝わっていると良かった」「5日間、すごく充実していたし、参加して良かったという思いがすごくあり、このプログラムに対してはとても満足している」などの記述がみられた。

## 3. 大学卒業生を対象とした調査の分析結果

調査回答者7,882名のうち大学卒業生は、153名(1.9%)であった。

### 1) 対象者の背景

・年齢は、22歳～57歳で、平均27.4±6.4歳であった。性別は、女性149名(97.4%)、男性4名(2.6%)であった。

・勤務施設は、病院が117名(76.5%)と最も多

く、次いで市町村役場・保健センターが 23 名 (15.0%) と多かった。

・職種は、看護師 97 名 (63.4%)、保健師 34 名 (22.2%)、助産師 14 名 (9.2%)、養護教諭 4 名 (2.6%) などであった。職位はスタッフレベルが 130 名 (85.0%) と圧倒的に多かった。

・在職年数は、10 年未満が 143 名 (94.1%) と圧倒的多数を占め、10 年以上 20 年未満が 6 名 (3.9%) などであった。

### 2) 本学との関わり・期待など

・本学と関わりを持っているが 98 名 (64.1%) で、特に関わりを持っていないが 51 名 (33.3%)、無回答が 4 名 (2.6%) であった。関わりについては、「図書館の利用」が 60 名 (37.7%) と最も多く、次いで「卒業生である」が 26 名 (16.4%)、「学生の臨地実習・演習に関わっている」が 23 名 (14.5%)、「大学教員が講師を勤める研修会に参加したことがある」が 11 名 (6.9%)、「大学教員と共同研究をしている」が 7 名 (4.4%) などであった。

・本学において実施したいことは、「図書館を利用したい」が 117 名 (41.9%) と最も多く、次いで「大学院 (修士課程) で学びたい」が 46 名 (16.5%)、「教員に相談したい」が 28 名 (10.0%)、「看護研究センターを利用したい」が 25 名 (9.0%)、「共同研究を実施したい」が 23 名 (8.2%)、「科目等履修生として学びたい」が 20 名 (7.2%) などであった。

・本学への期待 (制度・支援) は、「図書の貸出し」が 101 名 (36.7%) と最も多く、「専門看護師を取得できるプログラムの設置」が 78 名 (28.4%)、「大学院 (博士課程) の開設」が 45 名 (16.4%)、「遠隔地でも授業や研究支援が受けられるシステム (TV 会議など)」が 42 名 (15.3%) などであった。

### 3) 実践上の課題

・過去に実践上の課題があった者は、97 名 (63.0%) で、その内容として 35 のサブカテゴリー、20 のカテゴリーが抽出された。主なものは、「対象者への関り・対応」、「看護技術、コミュニケーション技術の向上」などであった。課題への取り組み方法では、「職場で話し合う」が 60 名 (38.0%)、「文献などで情報収集する」が 42 名 (26.6%)、「研修を受けた・勉強会を行った」がそれぞれ 28 名 (17.7%) であった。

・現在、実践上の課題がある者は、71 名 (46.1%) で、その内容として 20 のサブカテゴリー、13 のカテゴリーが抽出された (表 1)。課題への取り

組み方法では、「職場で話し合う」が 50 名 (23.7%)、「文献などで情報収集する」が 43 名 (20.4%)、「研修を受けた」が 35 名 (16.6%)、「勉強会を行った」が 29 名 (13.7%) などであった。

表 1. 現在の実践上の課題

カテゴリー	サブカテゴリー
対象者へのケア・関り方	対象者へのケア
	対象者との関り方
	対象者への教育・指導
	支援方法・時間の確保
	ターミナルケア・緩和ケア
看護技術・知識の獲得	クリニカルパス
	看護技術
	知識の獲得
記録	看護診断・地区診断
	記録
連携	連携
事業運営・評価	事業運営・評価
業務改善	業務改善
看護職のあり方	看護職のあり方
職員教育	職員教育
看護研究	看護研究
勤務体制・看護体制	勤務体制・看護体制
個人情報保護対策	個人情報保護対策
安全対策	安全対策
その他	その他

・研究として取り組みたいことがある者は、34 名 (34%) で、その内容として 19 のサブカテゴリー、15 のカテゴリーが抽出された (表 2)。

表 2. 研究として取り組みたいこと

カテゴリー	サブカテゴリー
看護管理	勤務体制・看護体制
	病院のシステム
	病床環境
地域における保健活動	地域でのケア・支援
	地域での保健活動・評価
緩和ケア	緩和ケア
	症状緩和のケア
小児と家族への看護	小児と家族への看護
精神疾患患者の看護	精神疾患患者の看護
手術後の看護	手術後の看護
家族に対する看護	家族に対する看護
ターミナルケア	ターミナルケア
看護職のあり方	看護職のあり方
他職種との連携	他職種との連携
生活習慣病予防	生活習慣病予防
患者参加型看護計画	患者参加型看護計画
感染予防	感染予防
院内教育	院内教育
その他	その他

#### IV. 考察

看護実践体験課外プログラムは、病院の積極的な協力の中で実施され、学生は看護学実習で学べなかったことを体験し、看護師の仕事を理解すること、看護師の仕事に興味を持つこと、就職を考える際の参考にすることに役立っていた。看護師間、他職種間でのコミュニケーションの重要性、観察力、計画性、臨機応変な対応の必要性を学んでいた。また患者への直接ケア以外の業務も多い現状を知り、そのような中で看護師の看護に対する思いやケアの根拠を話してもらうことから、自分自身がどんな看護をしたいかという考えをしっかりと持たなければ、忙しい業務に流されてしまうという貴重な学びをしていた。プログラムに協力して下さった看護師の方の評価は、回収次第、分析を行うが、反省会の中で「看護学校でも、このようなプログラムを実施すると良いのではないかという話しが病棟で出ていた」という発言もあり、現場側の評価も高いと思われる。

具体的なプログラム運営では、病棟の全スタッフに目的を周知する方法、担当看護師を決めること、プログラム期間と配属病棟数など、検討しなければならない点も多い。来年度の実施に向けて、現地側共同研究者と検討を重ね、より良いプログラムの開発を行いたいと考えている。

大学卒業者の調査については、今回の分析から、卒業後間もない者が多く、日々の業務の多くに課題を感じており、「対象者へのケア・関わり方」「看護技術・知識の獲得」などを実践上の課題としていることがわかった。その課題を解決する方法として「図書館の利用」が最も多く「図書の貸し出し」を本学に期待している者が多いということも当然の結果といえる。図書の貸し出しは、6月1日から開始される予定であり、今後は図書の充実が必要になると考えられる。将来的には、現場でのリーダー役割を担う者もいると考えられるため、本学教員との共同研究や岐阜県看護実践研究交流会などへの参加が増えることも期待したい。そのためにも、大学卒業者とコミュニケーションをはかり、本学が生涯学習センターとして機能するための取り組みの検討を続けることが重要であると考えられる。

#### V. 共同研究報告と討論の会での討議内容

現地側共同研究者、就職進路対策委員会が実施している就職体験モデル事業担当教員、就職体験モデル事業に参加した病院の看護師、その他の看護師と教員でディスカッションを行った。就職体

験モデル事業では、1クール目の2日間が終わった時点、本プログラムは、来週に開始されるといふ時期のタイミングの良いディスカッションとなった。

就職体験モデル事業参加病院の看護師から、2日間の学生の様子、反省会の内容が報告された。「学生は、現場をありのままに見て、複数の患者をケアするために、スタッフ間のコミュニケーションや患者把握が重要であることを学んでいた。学生も担当する看護師も初めての体験で緊張していて、師長が介入する場面もあったが、特に問題となることはなかった。学生は、自分が何を大切にして仕事を選ぶべきなのかがわかったと反省会で述べていた。」という内容であった。

夜勤体験の是非についても話し合いが行われた。就職体験モデル事業参加病院の看護師から、大変な場面である夜勤までは見せない方が良いという決定をしたが、大学側はどのように考えているのかという質問があった。本共同研究では、病院との話し合いで日勤のみに決めたが、聖路加国際病院や卒業生の話を参考にして夜勤を実施しないことに決定した経緯を説明した。聖路加国際病院では、聖路加看護大学の学生のみを対象に夜勤を実施した年もあったが、休憩場所の確保など大変なことがあるわりに、学生の評価は良くなく、患者との関わりの多い日勤帯の方が良いという結論に至っていた。また卒業生との懇談会の際に、本プログラムへの意見を聞いたところ、夜勤より日勤で多くの看護実践を体験する方が良いとの意見が圧倒的であった。

就職体験モデル事業では、1病棟で2日間という短い時間であっても、成果が上がっていること、本プログラムで学生が希望していない病棟師長から、「自分たちの看護の実際を学生に見せたい」という強い希望があることから、オリエンテーション後に1病棟以上を希望する学生については、その希望を受け入れることになった。

これらのディスカッションに参加していた看護師(就職体験モデル事業および本プログラム対象病院の所属ではない)から、現実をありのままに見せれば良いのなら、来年度以降、プログラムへの参加も考えたいとの発言があった。